

# 命と医療

神経内科医（東京中医鍼灸センター顧問）

金子吉弥

医療はもともと人がよりよく生きるための術として発展してきたに違いない。

しかし、今日、医療事体が高度に発達し、専門分化したため、何かそこに人間らしい共感を持ちながら、人が人に寄り添って治すという心が失われがちである。

問題は医師たち個人々々の問題を超越しているようでもある。何か力づくのものが人間同志の関係を壊しているようでもある。

医療制度や社会制度に問題があるのはたしかだが、どうしてもこの辺のことを理路整然と話せる自信も知恵のないのが正直な話だ。

そこで、今日のお話は、自分が医師として今まで経験した幾つかの臨床現場の実情というものを話したい。

結局は看取りの話、つまり人の死に際の話が多くなります。人の死に際というのはすなわち人の生き際のことです。

キューブラー・ロスという精神科の医師が記した「死の瞬間」という名著がありますが、彼女はその中で、ガンの宣告を受けた人々の心理過程に五段階あることを述べています。

1 否認と隔離、2 怒り、3 取り引き、4 抑うつ、5 受容の段階です。癌患者さんは必ずこの五段階を経て最後の受容に至るのです。

小生は佐渡で十数年、それから静岡の山奥で十年ほど仕事をしてきたのですが、佐渡で自殺しようとした70代のおじいちゃんがいました。

この方は、広島の方で、これが不思議なところで、地元ではなるべく自殺したくない、と思っている人が多いようです。

そこで佐渡で死に所をうろろう捜しているうちに風邪を引いて熱が下がらなくなり病院へ運ばれました。胸の写真でひどい肺炎で入院となりました。

診察してみると、左手にためらい傷が数箇所あり、これは自殺企図だとわかったのです。

ともかく何もしゃべらないので困りました。しかし、治療の効あり肺炎も治り、元気になりました。

その間、佐渡の優しい看護婦さんにほだされて話しをしてくれたのですが、このおじいちゃんは、定年退職後、奥さんと一緒にいつか全国を旅行したかったそうです。

ところが、おばあちゃんにきっぱり断られてしまいました（否認と隔離）。

頭にきてかっとなり（怒り）それならオレ1人で旅行してやると家を飛び出してしまったのです。

そうしてお金がなくなるまで三、四ヶ月間全国を放浪（取り引き）。

その間だんだん死にたくなり、佐渡で死のうと思ったそうです（抑うつ）。

家族に知らせると息子さんがすぐ来ましたが行方不明の届けを警察に出していたそうです。ともかく元気よく帰られましたので、最終的には己が運を（受容）したことになるのでしょうか。

ですから、この五段階は応用がきくと思います。

このたび、命と医療という広範囲の題を戴いたので、これを利用して、様々な医療の場で小生が経験した出来事を具体的に話したいと思っております。たぶん堅い話にはならないと思いますので、どうか肩肘を張らずに聞いて頂ければ幸いです。